川柳句集

愛染

橘高薫風

川柳塔社刊

著　者　　中之島公園にて

不思議な顔

薫風さんのポートレートは四度目である。いつも句集を出すときだった。処女出版から二十五年ほどになるが、少しも年をとらない不思議な顔だ。

川柳の三要素は、うがち、こっけい、かるみといわれているが、人生の老錬さが加わると、もうこの上はない。薫風さんも、そんな時期がきたのであろうが、顔には少しも表われない。

山本　邦

目次

序文……西尾栞
作品
有情……一
檸檬……一七
肉眼……四九
愛染……九九
あとがき……橘高薫風

題簽

橘高薫風

序

薫風君が第四句集「愛染」を出されることになった。洵に慶賀の至りである。

第一輯の「有情」は昭和三十七年七月十一日、三十六才の誕生日に出版された。第二輯の「檸檬」は昭和四十年六月、三十八才の時で、第三輯の「肉眼」は昭和四十八年六月の四十六才の時であった。生涯のうちで、一冊の句集も出すことの出来ない人がゴマンとあるのに、四冊目の句集を出す薫風君は、最高の力量をもつと共に幸福な方である。一言で句集と言っても、江湖に問う句が、又自己を知ってもらう充実した句がどれだけあるかと言うことと、経済的な面で、そう簡単に踏み切れるものではない。過去三冊の句集の発刊される時は、まだお母さんは、ご健在で、薫（本名）が句集出すのなら、私は一肌も二肌も脱ぎましょうというお話を伺ったことがある。

あの親孝行の薫風君とお母さんのコンビの美談は、私達を感激させたものであ

った。この度の発刊日はきっとお母さんの祥月命日の八月二十六日にされることだと思う。そして、お母さんにデジケートされるに違いない。美しいことである。

「有情」「檸檬」の序文は路郎先生が立派に書いておられ、「肉眼」は前主幹の生々庵先生が名文をものされている。今度私が序文を書く番になったが、薫風君の句は、先に出された三冊の句集によって既に定評があるので、今度出版される句集「愛染」はどんなに皆さんが期待されているかと思うと、私も胸の踊るのを禁じ得ない。

この度の句集「愛染」発刊は、時恰かも君の還暦に当るので誠に意義深い出版となった。肉眼発刊以来十三年の年月が経った。その間の彼独特のユニークな格調高い句は、前三冊の句集を凌駕していることは勿論で、薫風ファンの随喜の的となり、経典となり、聖書となって読者を魅了することと思う。そして第五句集の発刊される日を切望してやまない次第である。

薫風君は、目下川柳塔社の副主幹であり、雑誌川柳塔の編集長と八面六臂の活

動をしておられる。

胃半分肺半分の湯呑かな　と薫風君自身詠んでいられる健康で、こんなに活躍出来るのも、常に彼の健康に留意して、陰になり日向になって面倒を見ておられる献身的な奥様のおられることを忘れてはならない。句集「愛染」の後ろには、奥様のお力が燦然とかがやいているのである。二人のお嬢さんは既に結婚されて、可愛いいお孫さんもおられる。坊ちゃんは目下大学ご在学中である。才子有情、幸に加餐されんことを祈ってペンを擱く。

天神祭の日

水鶏庵にて

栞

有情（うじょう）

労働歌蟻が歌えば凄かろう

学生を矢面に立て国貧し

蕎麦の花地球滅びるなど思えず

椅子蹴って立ったに続くものがなし

四面楚歌故郷は豆の花の頃

四月四月長女章子誕生　二句

木も草も花をつけてる誕生日

春闘の真っ只中に子が生れ

一月十三日次女幸誕生

冬晴れて見馴れし山も高く見え

熱の子へ眼鏡をかけたまま眠り

麦の穂が目を刺しそうな都落ち

都会の夜セロリは母の香に似たり

母入院

一匹の蚊に病室の広いこと

母再び入院

かかる時海の晦さを持つ蚊帳よ

わが妻になすべかりしを賀状書く

本心が二伸に女心かも

湯槽出る男海より出るごとし

落選の酒は問答無用なり

おしなべて銀も鉛も卒業す

旨いとも言わず新聞ばかり読み

親捨てた仲とも見えぬ老夫婦

檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし

十二月宝石の美の極まれり

パトロンが替わり香水が替わり

蛇が皮を脱ぐようにまた離婚した

ぼんぼんの嫁は標準語を使い

惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華

草いきれ万葉の世の相聞歌

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅

これもおやすみなさいで終ってる恋文

花の香を嗅ぐ顔をして接吻し

老醜の土筆ほどにはなけれども

竹植えて雨うつ音を楽しめり

文机に菜根譚を伏せて留守

鳥取砂丘　二句

砂丘有情お前と月の出を待とう

旅人も月もやがては去る砂丘

句集「三文オペラ」の岩井三窓君結婚　二句

三文オペラ第二幕へとかかりたり

皆君のもの新妻の寝顔まで

飯を食うさえも勇気の要る日なり

恩借に父の容態ねぎらわれ

万歳万歳淋しさの残りける

籠の鳥とらわれの身の顔してず

妻若し水道一っぱいにひねり

浴衣着て又一段と名妓たり

牡丹へは蜂も静かな訪問者

島一つ買うて暮らせば涼しかろ

キリストの肋に似たる昼寝をし

商いのラムネ一本抜く暑さ

先生に床屋の順をゆずるなり

十二月子供ばかりで飯を食べ

立話長うて犬も坐り換え

菊大輪雲湧き上るごとくなり

菊人形小楠公は赤い菊

牛小屋に月光美しき浪費

菊の露ふくんで母の針仕事

フランス語講座女優の書架にあり

父親になっても膝を抱く癖が

父と来てずっと風呂敷持たされる

参観日この秀才の親が来ず

強引な碁をうつ聟をよしとする

恐妻家どこか張子の虎に似る

青春は旗飜るごとくなり

病院の風呂から藤の棚が見え

居酒屋の楽書帖に詩人の名

知恵の輪を抜くよう汚職無罪なり

傘さしてやってる方が刑事なり

先代に笑うた写真などはなし

三味線も弾ける大学教授なり

猫の首つかみ二階を降りてくる

テロリスト神明に加護祈るなり

荘厳ミサ

聖夜の餐神父の靴は常のまま

学問の灯は落ち着けり師走にも

呼鈴を大言海の上に載せ

人の世や棺に打ち込む釘もあり

霊柩車辻を曲ってから速し

香煙縷々いのち惜しめというごとし

檸

檬（れもん）

乱れ髪式部の世より恋は憂き

クリスマスカードの雪はしずかなり

魔の山と見えず初日の下にあり

風花の今日タイガースキャンプイン

除夜を聞く一つの旅を終えしごと

東北行　五句

特急は颯爽鳶の輪を残し

礼を尽くし礼を失し師と旅にあり

十和田湖

水の精覚め森の精まだ眠し

酸ヶ湯温泉

混浴のさながら古き風俗画

工藤甲吉氏へ

半白のオールバックに知情意が

極月やわが父の死を立話

父恋しわれも経読み鳥として

紫の椅子の愁いはわが愁い

あわれ子もやがて知るべし父の恋

お使いの継母こわし道こわし

弱肉強食鰐皮の鞄持ち

おととといと昨日と今日の虫の声

富士小さし生みの親をば思い出す

ラッシュアワーちりめん雑魚に相似たり

水中花水に疲れしごとく病む

銀漢へわれも不眠の病持つ

病みて長し仏像のごと拭かれおり

日向ぼこ病衣は襤褸になり易し

水枕干す秋の気が一入に

勲章の欲しい七才七十才

百合も薔薇も花輪になれば俗っぽし

雷蝶ステンドグラスからこぼれ

蜂の歩くは落武者に似る

憂鬱を伝染して帰る女かな

愛別離苦テープの色も濃紫

秋空に遠い景色を思い出し

寺と萩マンネリズムも美しや

愛読書青春以来ツルゲーネフ

青春のわが思い出に一神父

娼婦死し十字架にまた星戴く

男待つ灯に春夏秋冬

将軍に枕して寝る世が久し

川の面の煙突の影音楽的

六法全書の重さと聖書の重さ

火の消えた炬燵の上の置手紙

つり合わぬ恋にかじかむ女の手

行灯の灯は恩愛を思わしむ

角屋青貝の間

忍従の女心に光る貝

黒髪を梳くバイオリン弾くごとく

囀るは人の飼う鳥武蔵野よ

北陸豪雪　三句

豪雪の今年つくらぬ雪だるま

雪を掻くもはや旅人にはあらず

積雪一丈その下の金魚の朱

兼六公園

降る雪に貧しきものが先ず隠れ

美しいものに雪置く美しさ

元日の駅前広場広場となる

元日や王城の内写される

鼻の孔耳の孔まで元旦也

初鏡オールドミスでありけるよ

寝正月ガス中毒をしてへんか

誘拐をされこどもの日母の日過ぐ

ビリの顔もトップの顔も苦しそう

実印に苦悶の情が見えてきた

おたやんは大阪弁で喋りそう

子が病んで錨のごとしわが妻は

惜春の音の一つに昼の三味

大きな滝になろうと思う父の日に

螢飛ぶ一匹なれば人を恋わしむ

禽檻にいる殊に寂しき海の鳥

月光に眠れぬ新しい墓石

因襲は亀の甲羅の重たさだ

鷲の眼も駒鳥の瞳も鳥の目や

進む時計遅れる時計夫婦かな

ラーメンの胃の腑に思索なかるべし

あぶら足安サラリーを象徴し

蝶の妍極まればわが誕生日

明石

蛸壺へ人の子寝かす子守唄

白浜

稲妻に南紀州となりにけり

思案まとまり雨垂れが落つ

飼猫へやさしき言葉旅帰り

坂根寛哉君結婚

結婚をしてもハートのジャックたり

遠き人を北斗の杓で掬わんか

パチンコ屋大人は大志抱かざる

悪銭を分かち淋しさを分かち

人生薄暮空より降りし奴凧の顔

日向ぼこ梅干の種口にあり

城のある町への旅は恋に似る

羽根ペンで書きし嘗ての文学よ

一枚になれば銀杏の葉の形

絽刺する余生を埋めゆくような

君おもう熱もまじれる風邪の熱

旅ごころ旅の前夜を慎むも

別府温泉郷遠望

風神のたむろしている風袋

元旦も蜘蛛は姿を変えられず

十二月子のやわらかき蹠

十二月三十一日も傍観者

煮凍りよ少年の日は貧しかりき

美しい炭火恋しき鳴雪忌

入試の子と母起きている看病のごと

土に字を書き残し入る試験場

窪田久美子さんへ

淡雪のいつから君を知りそめし

阿古屋貝売る舗いつも朝焼けぬ

糸切れた琴はある夜の女に似

鳥取砂丘　一句

母の手をひいて砂丘の狐雨

東郷湖夕日ところを得て沈む

膝に手を置いて井上八千代かな

水都祭初恋の人年とらず

初恋のうすみずいろとなりにけり

恋なれやわれに鬣あるごとし

恋なれや汝れに羽交のあるごとし

金貸しに蛙のごとく手をつかえ

韓人の服に最も風薫る

鯉のぼり氏素姓なき爽やかさ

制帽の汗を先ず拭き顔を拭く

片肌になり双肌を脱ぐ太鼓

阿波踊　二句

鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ

われもひとも千手観音阿波踊

鳴門公園

遠めがね海の渦見てのどかなり

生まれし時灯ありき死に行く時灯あらん

別離

曼珠沙華君といるごとくひとりおり

男の子欲しわが為し得ざること多ければ

長男充誕生　二句

わが子男子旭のごときまる裸

産声のはっしはっしと聞えける

出産日父看護婦へ少し媚び

虹消えぬ嬰児の笑みに似たりけり

鬼灯よわが七才に恋ありき

月見草恋も滴るもののうち

銀杏散る風の祭を見るごとし

浜田久米雄氏勇退

いざ孫と麦藁帽に親しまん

串本海岸

ボディビル橋杭岩の力みよう

東京オリンピック

ひた走るアベベ仏陀の相に似る

恋人の膝は檸檬のまるさかな

みぞおち匂う人妻の恋

栄光の日も一日は二十四時

一茶忌の赤林檎より青林檎

灯を消せば彌勒女菩薩毛糸編む

おとがいへマスクをずらす赤電話

木の実彫りおりと見てあれば鶉

除夜過ぎて机上湧きくる泉あり

元旦やわけて四十という齢は

獰猛な熊が歩けり内股で

故郷に残る切株悔いのごとし

わが影の障子の影も香林忌

立ったまま眠るペンギン迷亭忌

子の寝顔汝が父母多くあやまてり

草餅へ墓を並べる死後の縁

掃苔の母の目まいが娘にうつり

墓の前刻去るままに去らしむる

妻よ子よ水の深さが臍を越す

魚屋の魚いろいろ妻が病み

入学へ畳を歩く新らの靴

苑の鵞鳥のよちよち歩き卒園す

金柑は皮を食わるる四月馬鹿

地の果ての如山頂を引き返す

愛恋の錆は何色桜桃忌

春惜しみおりひと言で事が足り

春愁の最たるは鳥菌を持たぬ

春風の帷に吹くごとき懸想かな

春孤独眼鏡はずせばなお孤独

人生譜柳は日々の風を見す

肉

眼

恩師の死その夜眠しとも眠し

炎天に寒疣立てて師を葬送る

屈辱の紋章女史に坐りだこ

ルンペンに王侯の鬚詩人の眼

コスモスのほったらかしの美しさ

ボーリング恋のライバル鑒

断崖絶壁断崖絶壁冬の恋

滝冰る信ずべからぬさめごと

長靴の片方どうしてもこける

福寿草父子兄弟に似たりけり

一人去り一人去る聖堂にして

子の頭蜆のごとし可愛ゆし黒し

われに過ぎたり絢爛と死ねる歳

鼻先をつんつん歩く好きな人

草の芽が出たぞおしっこさせながら

大国主命の国の春の雲

石の階童話を読むにうってつけ

路郎忌に炸裂したるカンナの朱

蓮の花は一茎一花恩師の忌

路郎忌に言葉を飾る人ばかり

恩師の忌血脈豊かなる蓮花

鐘の音さらに身のおきどころなし

秋風の天神さまの細道じゃ

絲瓜のあおほどの青なし祖父の愛

栄光のマントの裏は血の色だ

水郷　五句

水郷の微風から雨に移る候

水郷の鯉のぼりこそ泣かまほし

柳ポプラ柳ポプラ水郷よ

水郷の胸の高さに続く水

音のみの世界またよし水の上

兎の目ほどのしずかな恋ごころ

学問の跡形もなし小商人

川上三太郎先生へ

紫綬やよし詩人の胸をいろどるに

明治百年蹄の音は消え去りぬ

赤帽もそのうちみんな齢をとり

十二月あしかの声につまされる

中之島剣先は寂十二月

元日の恋に使いし一時間

オーバーの襟立てさらに破魔矢立て

何もかもぬかるむ戦後明治村

ベトナムや都会の鳩は銕のいろ

ベトナム遠し子のピストルに斃れる真似

建国祭寒の卵に血がまじり

飯盛山遺恨の如く雪残る

黝々と水かけ不動恋の垢

処女の死鏡の中へ歩み去る

人を待つかたわらの花嗅ぎもして

一日の重さ軽さよ日記帖

風薫る歩きながらのハーモニカ

テレビ見る子を頤と膝に埋め

金環蝕そらエンゲージリングだよ

舟歌は最も人を恋う歌か

同期の桜酒に爛れてしまいけり

句碑ありぬ亡き先生の背丈程の

夏雲の死ねば越ゆべき峰ならん

臘燭の数来し方の女人像

受験子に昼夜階なす時間表

乗　鞍

母と来てお伽話の花の色

噴水の形変らず恋終る

犬と住む都会の底の夜の底

明治村酔生夢死の昼の月

明治村烈婦というはすでになし

信濃の旅　三句

霧のダム紺の背広の竜神か

黄色い屋根の旅館に寝たり秋の信濃の

幻の女の息の霧の音

初冬の恋鶴の面着て立ち向かう

十年経て女の言葉あわれなり

汝が祈りふかからしむと雪を給う

天使と同じ羽根でクリスマスカードが着く

立ちたくて立ちたくて蛇木に登り

お元日わが家の波夷羅大将も

青年の歌なまぬるきお元日

お年玉不兌換紙幣ばかりなり

石くれも三つ積んだら思惟の塔

攻める扉逃げる扉を持つあいつ

友来る古きレコード回すべし

乳母車いのち育てしものなつかし

墓があり急に土あたたかくなる

滝の白雨は斜めに降りかわり

真心をあげて淋しくなりました

待つ人が来て愛犬を放ちやる

税務署出て万の毛穴を押しひろげ

春愁の無より淋しき無限大

笛吹き童子恋ならなくにならなくに

仏像を恋うるがごとき恋となり

秋吉台石の饒舌雲の黙

朱の鳥居愛恋道の入口か

寂まくと伎芸天女に指紋なし

四十過ぎ闇の深さが見え初めて

耕耘機色異なれど音同じ

尾道にて　三句

師はあらず文学小径埒もなや

尾道や今見下ろせし船に乗る

五月の雨尾道生駒似たるあり

掃苔の隣の墓に帽をのせ

暮れ切らぬ花火心があとさきで

能登から佐渡へ　八句

てんと虫ここにも小さい輪島塗

銭湯に隣す輪島映画館

鬼あざみ能登曇りてふ曇りあり

さい果ての旅に見し滝海へ落つ

海渡るたかが佐渡とは言う勿れ

花の墓大佐渡小佐渡並走す

忘恩や磯の香のせぬ日本海

男ありすっぱり痩せておけさ節

佐渡を去る

青佐渡を墓と思いしは只今なり

虹の輪に孔雀も負けん気を起こし

夜の波ふたりの心縫わせおり

霧の夜の松の林に死後の景

彼岸会の無音無明は亀にあり

睡蓮に汗くさき身を遠ざける

漆黒のピアノから出る海の音

晩涼の木に吊るされし歌謡曲

秋風に傷なきものはなかりけり

眼鏡屋は鰯雲ほど並べたり

一人旅切符切らるる音もよし

草臥れがどっと仁王の大わらじ

スケートを履くと獣の姿勢とる

清原祐志君　二句

耳濡らす涙生涯仰臥の身

君の骨栗拾うごと拾われよ

淀川の水滔々とお元日

冬夜の凍て愛恋の書も真理の書も

牡丹雪ゆっくり俺が昇天す

桂　浜

海の風竜馬の鬢へふところへ

讃岐富士一番星を簪に

夕桜琴朱の布に包まれる

吐く息も吸う息もなし夕桜

恋の句を刻まれし碑の濃陽炎

潮干狩竿突っ立てて帽子掛

猫柳亡き人ばかり思わるる

鳥取砂丘　二句

子と来れば砂丘隅まで砂の山

三人の子と玄奘のごと行く砂丘

夕桜恋の正体判らねど

原爆忌鳩ら火傷の脚運ぶ

広　島

ここに来て胎児のごとき祈りあり

恋人の芥子の涙でもいいさ

曼珠沙華恋わるるよりも恋うべしと

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

望郷よ地図の上では三糎

菊花展天守へやさし菊の塀

菊の呼吸処女懐胎もありぬべし

菊の壺薔薇の壺より物思う

青年長髪ピストル型のドライヤー

陸橋は天下の峡よ梯子酒

クリスマス祈れるものは祈りおり

消防車前方睨む人ばかり

夜の長さ襖をあける猫がいて

妻病む　五句

手術なお神の議りに似し医師ら

手術なお交響楽が鳴りつづけ

呼吸つめていのちを合わす久しぶり

病院の丑満刻を尿捨てに

病院の金魚寡多なく退院す

元旦や偈頌のごとくに師の一句

読み初めの今年は石田波郷集

妻再び入院す　三句

妻に病まれ壺中をのぞく日に幾度

病妻は少女のようなくくり髪

袋ごと蜜柑食う子よ母が病み

一隅というは安けし猫などいて

噴水と相似の緑柳なり

雪国の桜でありし桜漬け

藤巻昌子さんへ

婚を約し月へ帰れぬかぐや姫

光堂大阪地獄から来しに

枕抱いて胃をかばえるか虫を聞くか

斜に見て天のひとでの大文字

大文字額の焼ける火なりけり

大文字夢の多くは夢で終る

額縁を出て薔薇捨てし夫人像

入院手術　六句

入院やわが来し方の土埃

天井が未来へ移行担送車

麻酔より醒めて必ず夜なりけり

鷺一羽身じろぎもせぬ手術熱

秋の雨しずかに粥がこなれゆく

胃半分肺半分の湯呑かな

嗚呼清水白柳氏

大輪のぐわらりと菊の散りざまや

霜月悲唱　三句

ハラキリ由紀夫へ雪降らず花散らず

死にに行く鉢巻の尾を長垂らし

終焉や裂けてくれない増す柘榴

ジンフィーズ美人は美徳だと思う

風花す雪子が髪を梳くらしく

長男の頭へ手を載せやすき背丈

通り抜け花の濃淡夜に入りぬ

陰陽石つつじの燃える頃となる

中尾藻介兄へ

男へもやさしい手紙書く男

切手にも金魚が泳ぎ風薫る

梅雨明けの雷どんと路郎の忌

路郎の忌立膝癖も師父ゆずり

路郎の忌天牛に来て落ち着きぬ

馬籠・妻籠にて

お六櫛われを籠らすひともなし

雲波に波雲に似しはたちの日

ベトナムの難民に似た痩昼寝

生き死には碁石のことでないのなり

黙契や野に紫の花が増え

秋が来て笛は太鼓を恋しがる

吉村和美さんへ

葛の花咲き樹下美人嫁ぎしと

憂国忌柿は蔕のみ残りたり

切株の俺の五年と子の五年

冬の酒蛸の足こそ親しけれ

白蝶入り黄蝶出て来ぬ寺の門

夫婦にはなれなかったが冬の旅

枯枝に烏幾世の友情か

革命をめぐらすに湯に身が浮くよ

お元日日本人の目の黒さ

誕生の馬の額の白い星

紅椿雪を解かしていたりけり

黒い炎は人妻の掌の黒茶碗

志操とや嘴にある鼻の穴

手に足に関節のある寒さかな

四つ足で歩けば楽になる傷か

黙契やいまも仏法僧がなく

ギター抱きぼろんぼろんとこぼす悍

吊皮は手枷生涯平社員

受験子のすでに闘う白い息

冬牡丹九死一生かも知れず

一日に精魂尽くす痩せようだ

反葬は雪の巓から李花の里

琴古く曲新しくいのちの譜

水浴びの鳥を見ている人妻か

少年の幾人いても毬一つ

七月の蜂起の空となりにけり

恋人がいま肉眼に入り来る

浄瑠璃寺　二句

見残した夢を見ている塔の朱よ

立たせたき人睡蓮と塔の間

板尾岳人兄

山男山の画集に汗おとす

大文字恋のはじめのごとく点く

大文字はや消えかかる第二劃

堀江正朗氏還暦

心眼に六十一の秋が澄み

一生に一度の御籤父のみくじ

当選をしたら鰈を裏返し

旅館廃業

人生に起承転結ありにけり

父の忌に障子の部屋もなくなりぬ

父の乗る船の模型が応接間

水飲めば涙に変る恍惚の人

元旦ぞルバング島も元旦ぞ

ルバングの一兵の生宮中歌会

裏梅は聞えぬふりをする女

深眠り母娘相似のカメオ置き

哀歓の底に穴ある植木鉢

裏切られあたたきもの放尿す

姦計を鯛の目玉にさげすまる

暮れるばかり暮れるばかりの木屋町や

呼び戻す背なの赤子の名を呼んで

安からめ御身の胎児たり得れば

足摺の雨は遍路へ地から降る

寂滅と遍路の果ての月見草

路郎忌の天守の鯱に見据えられ

陶枕に睡蓮恋し女人より

睡蓮は万丈光の光源よ

愛染（あいぜん）

ペディキュアの足を仏足頂礼す

遍路杖納めセールスマンの足

夢に見る父は父よりやさしかり

耳垢と耳学問をわびしがる

隠健を徳となすなり福寿草

日の高さ悪事悪事とならぬなり

のけぞって見えた師走の青い空

へらへらと泳ぐ魚に似た汚職

薬玉の中の鳩なり受験の子

臍の緒がまた生えてくる子の受験

端然と墓のようなる書家の墨

昼の月瓢湖に映る力なし

花つけて白鳥の首シクラメン

聞香の首かしげいる白鳥か

玄人が包むと角が生きてくる

心経の無の字の多き金泥なり

三日月はこわしと乙女恋したり

読む限り末法の世も面白し

草花に水をやる世は渇したり

落選す百万言を費して

雲は挽歌雲は新生恩師の忌

十年の歳月が澄む竹の節

降伏は心服ならず資本家よ

蝶がいて石に老若男女あり

朝刊の音のさらりと今日も晴

陸奥哀しむつ又かなし名をあげて

鉄の火と芒の炎男と女

田中を刺し中曽根を刺す標本名黄金虫

竜宮もヘドロ藻泥となりぬべし

牛頭馬頭の雲は動かず原爆忌

禊する蓮花の菓子を口にして

失恋の四十九日となりけるよ

花言葉忘恩もある不死もある

胡座して仏のあぐらより涼し

どう呼ぼうとも情婦には違いなし

隠岐行

雨意将に至らんとする摩天崖

長崎行　四句

長崎の霞はまるし湾円く

磔像へつるべ落しに夕日落つ

かまぼこと平戸未練を持ち帰る

小便を風に散らしぬ大瀬崎

目に余るものにロビーの登山靴

清しさは秋に衰え冬に死し

西成のシャツステテコは王衣に似

帰省子に地酒の味が真新し

三日月があんなに光るのも勇気

トンネルが遠くに見える秋の恋

鰯雲びっしり僕の歯は抜ける

天来の妙音蔵す白百合は

白い服の娘に与えしは白薔薇

死ぬ時は死ぬさと柿を剝いている

晩秋に水は一番重くなる

氷嚢の下から見てる好きな人

スト権スト昨日は勤労感謝の日

水の上蛇の長さが長くなる

十二月の粋人奇人物語

新年や男も竜も玉を抱く

盃の酒甕の酒より重し

花火爆ぜ微塵地獄にいるふたり

裁かれるのに座布団が敷いてある

目に見えぬものを支える釈迦の指

ハワイ紀行　五句

ハワイ行ＧＯのランプか月が出る

ハワイまで星を閲して来たりけり

われら迎うオアフは波のレイかけて

枝のない椰子を夕日がすべり落つ

就中ひょろひょろ椰子の親しさよ

偽証する伊藤大久保維新の名

児玉誉士夫の笑い袋や金袋

小佐野児玉の暗い寒山拾得図

勲一等黒き旭日大綬章

エリートの狐が落ちた獄の顔

松本波郎夫人を悼む

おだまきが咲いてる紫の涙

鑑真和上像

おん目元さつき明りのし給える

童唄生別死別異ならず

チューリップ胡蝶の奈落かも知れず

緑陰におならしそうな羅漢さん

鵜もやがて切り絵の闇に紛れたり

酔眼に鵜綱の張りの十二筋

綻びを繕うごとく鳴くちちろ

阿難尊者に遠し恩師の忌

ペン握る指のかたちも枯れはじめ

妹に紙の兜がよく似合う

鰯雲奴は精神貴族だな

死後の肋は赤い鳥棲む鳥籠に

板尾岳人兄へ

項上に汗ひく顔の謝霊運

似てるなと河童は蟷螂に見入る

仏手柑ひとつ新年の文机に

露草よ額田王が袖を振る

人間を的にしているから外れ

子の名ほど迷わず孫の名を決める

仲間割れしていさぎよし流れ星

赤鬼も煩悩を持つ臍を持ち

任侠は男のロマン喉仏

ポッペンはブーツの女にも似合う

逝く春へ白だけ残る五色豆

修業とや砥の前で小半日

夢醒めて紙の音する千羽鶴

恋文の緘は水平線に見え

病み上りに心もとなき鰈の目

曼荼羅に原子のごとく仏たち

七月よ煙草の輪にも力あり

裏切りに思い当るは茄子のかるさ

氷柱花電話ボックスには女

きりぎりすちょんと男は立ち上る

臍放り出してて社長隙がなし

母一人子一人秋の灯を分ち

志衰えて書く立志伝

月下美人王昭君が逝きまする

聖書一冊を草分けの力とし

父の苦悩に裸の煙草が散らばっている

桃の花桃の実桃の核みなわたし

背徳や三面鏡の無数の顔

美しい丘日本にキリストは出ぬ

敗戦忌バスケットから犬の顔

ものを書く姿勢に骨は安んずる

新婚のスプーンに指紋つきはじめ

一芸に秀でし顔へ初明り

初日記夢を針小棒大に

亜鈍さんを祝う

お恥かしい古稀と宿老温かし

パントマイムの妻に止めを刺されたり

演出をする齢でない齢でない

油断して画家白色を使い過ぎ

樹に添うて力をもらう風の葬

紫に男女の別のあるごとし

昔から女が走る愛の時

河豚食うて処女穢れること勿れ

水の渦想いの渦も春になり

海鳴りへ標本室の貝の耳

やがて女は友情を持てあますだろ

愚の酒で愚の骨頂となり給え

牧人さんを悼む

死顔のなお満を持し満を持し

先生と同じベレーを被ていても

はた目には余程の度胸僧になる

朝顔のファンファーレの中僕は生れた

背の小さい方が姉なり桜草

路郎忌や痩身力士勝名乗

一点鐘わたしのマリヤ欷歔く

落日と夕日は違う別れ来て

最晩年充実紫陽花濃紫

氷挽く鋸友情も篤からん

寺尾俊平さん新居落成

蔓ばらと善魔の護る城ならん

柳暗やお染久松蔵の窓

紫陽花の炎群愛染不動かな

モンロー忌飯田蝶子も死んだれど

君にふたごころわがあらめやもモンロー忌

モンロー忌黒子の位置の恐るべし

春愁の半歳経たるかな秋思

夏の愛形を変えて鰯雲

こおろぎのように泣けたら涅槃かな

城うらのまてばしいの実待つ楽しさ

おもしろさ雀は跳ねて鳩歩く

月光は黄金から白金へ告白す

合歓の花雨に濡れてるのは乳房

恋痩せの乳房から痩せきしという

鯊を釣る鯊のごとくに群がりて

子と見れば月下美人は宇宙船

大矢十郎氏息女栄子さんの結婚を祝し

花嫁に牟婁の海山弥朗ら

三段峡にて　二句

恐懼せり紅葉と滝の神の前

友情に深入山の名もうれし

走馬灯霊は肉より現なり

一輪の菊は気合で咲くごとし

入学のよい目よい耳よい眉根

ネクタイのままでデカンショの輪に入り

花の宴家康ひとり目をつむり

昼の酒遠く雷鳴っている

赤い弓持ったばかりに天使堕つ

マズルカへ拙者お相手仕る

鳩時計の鳩が覗いた悪だくみ

建仁寺垣相国寺垣マドモアゼル

紫の花何本も摘み難し

飲む会のハガキは箸で裏返す

初明り祕仏開扉もかくやあらん

悪筆も墨痕淋漓年賀状

削られて以来丘には虹立たず

葡萄食べ終ると焼跡のような

映画ほど静かではない恋終る

田中博造・峰代夫妻に女子誕生

虹の子を千晶とこそは名付けたれ

海の風宮島蟬の越天楽

丸い石四角い石をさげすむか

紫の色の気合が分りかけ

ラブレター死屍るいるいとありにけり

悼大野源一九段

閻王の前でも飛車の気っ腑なり

つきあいで踏まれています邪鬼の顔

落椿情炎未だこちら向く

水仙よりスキーのジャンプ端正に

次女早稲田大学入学

遊学の娘の決心と花のペン

タンポポの絮に意志ありわが怯懦

その日以後語らず書かず娘を思い

苦楽園口のさくらを見に来いと

一年生だけは帽子を着てくれる

ここは土佐河伯と河童呑みくらべ

夕桜釈路郎が向うから

水子塚時に桜も蒼ざめる

牛が眼をつむると大平正芳か

忍耐も少し異なる美女醜女

口説かれているに女は箸止めず

春眠のそのまま覚めぬ死もあらん

蜂蜜に花の香りの遠い人

昼は花を夜は花火を見たふたり

少年のように近頃夜が怖し

タンポポはタンポポという河内弁

自らに同情をして釣りに出た

路郎選集校正しおり路郎忌に

路郎忌のわれよき友と旅にあり

路郎忌の氷も白い炎かな

あの女ほたほた炎落し行く

敗戦日分水嶺の如くあり

敗戦日われ人生を二つ生き

ハンカチを黙って渡す妻の汗

百匹になると鰻も修羅になる

手榴弾かつて握りし掌にレモン

火の恋と氷の恋に天の川

空腹も贅の一つよ名月よ

恩師矍鑠槍さびを口ずさみ

菊の日の白い炎に焼かれける

朱の菊あってもよしと思うなり

八百長相撲も礼にはじまり礼に終る

喃妻よ鮎まで値切ることはない

銃殺と同じにモデル囲まれる

老桜のほつほつと咲く童心か

水仙が並び口開く聖歌隊

こんな恋ならと百人一首かな

河内天笑・野坂つき子さんへ

月が出て蒼天笑う如くなり

激励を青い背広で聞いている

銀杏の黄労痎よりも透き通り

養命酒汚辱のいのち養えり

淋しさは前行く犬の足の裏

かたくなに句をつくらねば喪のごとし

この花にあのような実が四月馬鹿

選挙をば戦と呼ぶは平和かな

黒百合を見てこの旅はこれでよし

赤い駅青い駅あり人生に

青森行　四句

梅雨ついてブルートレイン青深め

親しさはねぶたの顔でお出迎え

恐山四人四本の死人花

恐山空焼けるとき恐山

海底の都は憂きか平家蟹

通り抜け附和雷同の顔連らね

風渡る愛の伝わりゆくさまに

いつまでも背もたれのない僕の椅子

落武者の強さ髻切れてから

やわらかい枕に義理がすたれ行く

おぞましき議員の胸の赤い羽根

鉄砲玉もひょうろく玉も定年か

真相は大根になる貝割菜

家元のお供で寺の昼を食べ

道化の死蝙蝠傘は舟になり

雪霏々と滝の吐き出すものでなし

古手紙この世のことはこのような

父親の懐ふかき凧の糸

杯なめて木曜とらえどころなし

白色も一色ならず死生の裡

水は低きに友も低きに流れるか

お手植えの松枯れながら続く昭和

啓蟄の虫より先に代議士め

横揺りにあしかが歩く金脈へ

寝転んで読むを許さる卒業し

入学と卒業姉妹ピアノ弾く

春情やちまたに枝垂るもの多し

孔雀羽根ひろげくるりと能役者

楽しげは怨嗟の声の小鳥たち

合掌の手が焔とも見えるなり

美しき地獄牡丹の散りしける

青い葉は花よりすがし晶子の忌

落胤の身の放埒が募るなり

父と子と手をつなぎ行く盆の窪

旅人へ何と親しい駅だこと

梅雨の街碧眼灯すごとく行く

ああ五十妻が侮る子が叛く

金脈へ力無き蝦骨(かえる)無き蚯蚓

涼しげに老樹一蟬点したり

堕地獄のいのちもたった一つきり

かまきりの鎌振り上げて事切れし

穂芒の如き魂ありにけり

勇の川白秋の川恙無きや

横顔の子規も八雲も荒仏

われもまた己を知らずお元旦

年寄の居ぬお雑煮は淋しかろ

われをしも駅馬貴人と名付けんか

悼大山あや子さん

優しい人をなおもやさしく有馬筆

禅僧の描く円に似た大根煮

ぎんなんの水平線も遥かなり

水平線今にどんでん返しある

嗚呼麻生葭乃先生　三句

訃は常にかかるかたちで来る白刃

髭を剃る千本の樹を薙ぎ倒す

花の散る今日一日は物言うな

シクラメン伐折羅大将より激し

形見分け暖かい石冷たい石

かなしみの西より来れば西へ旅

その時の警策に似た父の文

母の顔安楽椅子の観世音

猪口を持つ手つき恩師に似て来たり

申告を散歩がてらの老教授

柳川にて

白秋は朱欒のごとし陽のごとし

本棚を砦のように老作家

白菜の悲鳴が妻に聞えたか

藤沢桓夫先生喜寿

清冽な泉を抱いて大樹かな

自愛とはこの一杯よ誕生日

鶴の愚鈍亀の狂気をあこがれる

花の絵の鍋で魚が焦げている

決断の兜をかむる顔になる

母病むに紅白の別花に多し

砂時計突如竜巻母が死ぬ

その朝も髭を剃ることからはじめ

合歓の花母の乳房を焼いて来ぬ

朝々を羯諦羯諦と悔いつづけ

亡母の闇は欝金の闇か夢に見たし

亡母の闇この世は雨が降っています

香の銘天菊とあり亡母の闇

白菊千日仏も飽きはしませぬか

墓の前もとの子一人母一人

赤電話髭の殿下じゃなかったか

鰭だけを動かしている河豚の顔

月天心男が出会うたのは男

人妻と濁りにしまぬにごり酒

流木は岸見え出してから焦る

亡母初盆

送り火を極楽の火と子は信じ

真実のほど雑草の花白し

長女章子結婚　二句

白は光りに光る綿帽子

紅唇もまた光りに光る綿帽子

娘が嫁ぎ炬燵で正座する父か

畏友俊平兄へ

やがて君と伯夷叔斉たるもよし

初光悪人ばらを刺し通し

大正はガムを吐かねば字は書かぬ

来し方を溶かせば淡いむらさきか

梅よりも桃に魅かれる少し老い

軽い嘘種なし葡萄食べながら

りんどうの花の情熱こそ確か

軍鶏抱いて男の流転限りなし

梅が言う少し上手に齢とれと

剃髪をして紫の底知れず

余呉の湖灯ともし頃は灯がともり

白い山燦然とあり儀式の場

見返るに長すぎはせぬ鶴の首

豹を着て豹の匂いのする女

茶の間では書斎の頑固ほどでなし

揚雲雀迦陵頻伽となりおおせ

落雲雀亡母の居どこは地か天か

紫は仁義礼智信を統べ

白牡丹レーダーよりも雨気を知り

男を磨く女を磨くやや違い

城北菖蒲園

なかんずく紫式部むらさきに

眼鏡拭きほとぼりはもうさめたろか

父の日か秋にはおじいちゃんになる

亡母三周忌

亡母の闇黒い壜から酒を酌ぐ

郡上八幡

宗祇の水柳一葉と掬うなり

初孫誕生

栗の毬孫は子よりも小さきよ

初孫と握手する一本の指で

生き方を青から赤に替えるなり

僕の富レモン一個を棺に入れよ

往診で猫の仲人して帰る

正月元旦から物足らぬ物足らぬ

一番に孫の箸紙書いた新春

若者の髭にうたれたためしなし

河豚提灯ふぐは涙をこぼさぬか

足形の果なくつづく雪女体

風邪ひいた顔も魅力であった頃

内緒ごと花の下では言いにくし

面の裏菩薩も夜叉もなかりけり

背番号1は孤独を強いるよう

世の移り変りさびしい雀ずし

吊皮に横溝正史片手読み

花よりも紅葉に似合う紺のれん

のれん分け電話一番違いなり

吉野大夫高尾大夫の菊の首

英雄は花という字にこがれ死ぬ

校長が校長らしい松の内

長年の欲一本の皺となる

犬を見ていますしばらく犬時間

三代に仕えた安楽椅子という

日だまりに似て灯だまりが秋にあり

路郎忌のこれも魂金魚の朱

路郎忌の暑さと葭乃忌の寒さ

函館行　三句

恋人の名より親しい摩周丸

イカソーメン妻子を思うことなかれ

睡蓮の炸裂もよし五稜廓

サーカスに似て来た五輪大一座

夏の風邪瀬古とマラソン走るなり

本棚に隙間のあるは油断かな

大山も影大山も盆に入り

剃髪をして煩悩のひとつかみ

中国吟行　十句

謝々と栞大人長箸で

死より先ず生おそろしき玉仏寺

サルビアも思想魯迅の墓の道

上海の夜と思う夜の赤い酒

蘇州では蘇州の歩幅塔二つ

山容の変幻天地玄黄と

奇巌重畳影かと見れば影の山

水牛に雨笠煙蓑の情(こころ)あり

秋の月餅春風点心店にありや

妻に買う小さい翡翠の色定め

飛ぶ鳥へ飛ばざる鳥へ初光

但馬牛美し百獣の王よりも

東京の娘の着くを待つ祝膳

祝膳孫の正座はままならぬ

幼な子も思いを遂げた顔はよし

番号に悲喜ある日なり風の中

観心寺

探梅に大楠公という地酒

新内は腸にしむ路郎の忌

七夕の赤い色紙へ釈路郎

毎日の中の一日誕生日

次女幸結婚

鏡照り照りて花嫁はわが娘

還暦や吉祥天と初詣

還暦の若水なれば若やいで

還暦は実年の花弓始

八十になったら恋をしてみよう

川柳句集「愛　染」索　引

あ

商いの……一〇
あわれ子も……一九
愛別離苦……二二
秋空に……二三
愛読書……二三
行灯の……二五
あぶら足……三〇
悪銭を……三二
淡雪の……三六
阿古屋貝……三六
愛恋の……四六
秋風の……五三
赤帽も……五五
秋吉台……六六
青佐渡を……六九
秋風に……七一
秋の雨……八二
秋が来て……八七
哀歓の……九五
足摺の……九七
胡座して……一〇五
阿難尊者に……一一四
赤鬼も……一一七
朝顔の……一二五
紫陽花の……一二七
赤い弓……一三一
悪筆も……一三三
あの女……一三九
朱の菊……一四一
赤い駅……一四五
青い葉は……一五一
ああ五十……一五二
朝々を……一五九
赤電話……一六一
揚雲雀……一六六
足形の……一六九
秋の月餅……一七六

い

椅子蹴って……一
一匹の……三
居酒屋の……一三
因襲は……三〇
稲妻に……三一
一枚に……三三
糸切れた……三六
銀杏散る……四一
いざ孫と……四一

一茶忌の……四二
石の階……五二
飯盛山……五七
一日の……五八
犬と住む……六〇
石くれも……六三
呼吸つめて……七八
一隅と……八〇
胃半分……八三
陰陽石……八四
生き死には……八六
一日に……九一
一生に……九三
鰯雲ひっしり……一〇八
妹に……一一五
鰯雲奴は……一一五
一芸に……一二二
一点鐘……一二六
一輪の……一三〇
一年生……一三六
銀杏の黄……一四三
いつまでも……一四六
家元の……一四七
勇の川……一五三
生き方を……一六八
一番に……一六九
犬を見て……一七二
イカソーメン……一七三
祝膳……一七七

う

旨いとも……四
牛小屋に……一一
美しいものに……二六
美しい炭火……三五
生まれし時……三九
産声の……四〇
兎の目……五五
乳母車……六四
海渡る……六八
海の風竜馬……七三
裏梅は……九五
裏切られ……九六
雨意将に……一〇六
鵜もやがて……一一四
裏切りに……一一九
美しい丘……一二一
海鳴りへ……一二四
海の風宮島……一三四
牛が眼を……一三七
海底の……一四六
美しき……一五一
梅よりも……一六三
梅が言う……一六四
初孫と……一六八

え

栄光の日も……四二
苑の鵞鳥の……四六
炎天に……四九
栄光のマント……五三
枝のない……一一一

エリートの演出を……一一二
映画ほど……一二二
閻王の……一三三
英雄は……一三五
……一七一

お

おしなべて……四
親捨てた……四
檻の鶴……五
惜しみなく……六
恩借に……八
お使いの……一九
おとといと……二〇
男待つ……二四
おたやんは……二八
大きな滝に……二九
禽檻にいる……二九
男の子欲し……四〇
おとがいへ……四三
恩師の死……四九
大国主命……五二
恩師の忌……五三
音のみの……五四
オーバーの……五六
処女の死……五八
お元日わが家……六三
お年玉……六三
尾道や……六七
鬼あざみ……六八
男あり……六九
男へも……八五
お六櫛……八六
お元日日本人……八八
隠健を……九九
小佐野児玉の……一一二
おだまきが……一一三
おん目元……一一三
お恥かしい……一二二
おもしろさ……一二八
落椿……一三五
恩師嬰鑠……一四一
恐山四人……一四五
恐山空焼ける……一四五
落武者の……一四六
おぞましき……一四七
お手植えの……一四九
送り火を……一六二
落雲雀……一六六
男を磨く……一六六
往診で……一六八
幼な子も……一七七

か

学生を……一
かかる時……三
籠の鳥……九
傘さして……一三
学問の……一五
風花の……一七
雷蝶……二二
川の面の……二四

元日の駅前……二七
元日や王城……二七
飼猫へ……三一
元旦も……三四
金貸しに……三八
韓人の……三八
片肌に……三八
元旦やわけて……四三
鐘の音……五三
学問の……五五
元旦の恋に……五六
風薫る……五八
元旦や偈頌……七九
額縁を……八一
風花す……八四
枯枝に……八八
革命を……八八
元旦ぞ……九五
姦計を……九六
かまぼこと……一〇六
かたくなに……一四四
風渡る……一四六
合掌の……一五一
かまきりの……一五三
形見分け……一五六
かなしみの……一五六
軽い嘘……一六四
風邪ひいた……一七〇
鏡照り……一七九
還暦や……一七九
還暦の……一七九
還暦は……一七九

き

木も草も……二
キリストの……一〇
菊大輪……一一
菊人形……一一
菊の露……一一
恐妻家……一二
銀漢へ……二一
君おもう……三四
金柑は……四六
金環蝕……五九
霧のダム……六一
黄色い屋根の……六一
霧の夜の……七〇
君の骨……七二
菊花展……七六
菊の呼吸……七六
菊の壺……七六
切手にも……八五
切株の……八七
ギター抱き……九〇
帰省子に……一〇七
偽証する……一一二
きりぎりす……一一九
樹に添うて……一二三
君にふたごころ……一二七
恐懼せり……一三〇
菊の日の……一四一

金脈へ……一五二
ぎんなんの……一五五
奇巌重畳……一七六

く

草いきれ……六
クリスマスカード……一七
勲章の……二一
黒髪を……二五
草餅へ……四五
屈辱の……四九
草の芽が……五一
黙々と……五七
句碑ありぬ……五九
暮れ切らぬ……六七
草臥れが……七一
クリスマス祈れる……七七
雲波に……八六
葛の花……八七
黒い炎は……八九
暮れるばかり……九六

薬玉の……一〇〇
玄人が……一〇一
草花に……一〇二
雲は挽歌……一〇三
勲一等……一一二
愚の酒で……一二四
苦楽園口の……一三六
口説かれて……一三七
空腹も……一四一
黒百合を……一四四
孔雀羽根……一五〇
栗の毬……一六八

け

月光に……二九
結婚を……三二
建国祭……五七
原爆忌……七五
月下美人……一二〇
月光は……一二九
建仁寺垣……一三二

削られて……一三三
激励を……一四三
啓蟄の……一四九
決断の……一五八

こ

これもおやすみ……六
強引な……一二
香煙縷々……一五
混浴の……一八
極月や……一九
豪雪の……二六
子が病んで……二八
恋なれやわれに……三七
恋なれや汝れに……三七
鯉のぼり……三八
恋人の膝は……四二
木の実彫り……四三
子の寝顔……四四
コスモスの……四九
子の頭……五一

耕耘機……六六
五月の雨……六七
恋の句を……七四
子と来れば……七四
ここに来て……七五
恋人の芥子……七五
婚を約し……八〇
琴古く……九一
恋人が……九二
降伏は……一〇三
牛頭馬頭の……一〇四
児玉誉士夫の……一一二
子の名ほど……一一六
恋文の……一一八
志……一二〇
氷挽く……一二六
こおろぎの……一二八
恋痩せの……一二九
子と見れば……一二九
ここは土佐……一三六
こんな恋……一四三
この花に……一四四
香の銘……一六〇
娘が嫁ぎ……一六二
来し方を……一六三
校長が……一七二
恋人の名より……一七三

さ

砂丘有情……七
三文オペラ……八
参観日……一二
囀るは……二五
魚屋の……四五
さい果ての……六八
讃岐富士……七三
三人の……七四
鷺一羽……八二
盃の……一一〇
裁かれる……一一〇
最晩年……一二六
淋しさは……一四四
三代に……一七二
サーカスに……一七四
サルビアも……一七五
山容の……一七六

し

四面楚歌……一
春闘の……二
十二月宝石……五
島一つ……九
十二月子供……一〇
三味線も……一四
除夜を聞く……一七
弱肉強食……二〇
娼婦死し……二三
将軍に……二四
実印に……二八
思案まとまり……三一
人生薄暮……三二
城のある……三三

十二月子の……三四
十二月三十一日……三五
出産日……四〇
除夜過ぎて……四三
春愁の最たるは……四七
人生譜……四七
路郎忌に炸裂……五二
路郎忌に言葉……五二
紫綬やよし……五五
十二月あしか……五六
受験子に……六〇
初冬の恋……六二
春愁の無より……六五
朱の鳥居……六六
寂まくと……六六
四十過ぎ……六六
師はあらず……六七
漆黒の……七〇
潮干狩……七四
消防車……七七
手術なお神の……七八
手術なお交響楽……七八
死にに行く……八三
終焉や……八三
ジンフィーズ……八四
路郎の忌立膝……八五
路郎の忌天牛……八五
白蝶入り……八八
志操とや……八九
受験子の……九〇
少年の……九二
七月の……九二
心眼に……九三
人生に……九四
寂滅と……九七
路郎忌の天守……九七
心経の……一〇二
十年の……一〇三
失恋の……一〇五
小便を……一〇六
白い服の……一〇八
死ぬ時は……一〇八
十二月の粋人……一〇九
新年や……一一〇
死後の肋は……一一五
修業とや……一一七
七月よ……一一八
新婚の……一二一
死顔の……一二四
路郎忌や……一二五
春愁の……一二八
城うらの……一二八
春眠の……一三八
少年の……一三八
路郎選集……一三九
路郎忌のわれ……一三九
路郎忌の氷……一三九
銃殺と……一四二
親しさは……一四五
真相は……一四七

白色も……一四九
春情や……一五〇
シクラメン……一五六
申告を……一五七
自愛とは……一五八
白菊千日……一六〇
真実のほど……一六二
白は光りに光る……一六二
軍鶏抱いて……一六四
白い山……一六五
正月元旦から……一六九
路郎忌のこれも……一七三
路郎忌の暑さ……一七三
謝々と……一七五
死より先ず……一七五
上海の……一七五
新内は……一七八

す

水中花……二〇
進む時計……三〇

水都祭……三七
水郷の微風……五四
水郷の鯉のぼり……五四
水郷の胸の……五四
睡蓮に……七〇
スケートを……七二
睡蓮は……九七
清しさは……一〇七
スト権スト……一〇九
酔眼に……一一四
水仙より……一三五
水仙が……一四二
涼しげに……一五二
水平線……一五五
砂時計……一五九
睡蓮の……一七三
水牛に……一七六

せ

先生に……一〇
青春は……一三

先代に……一四
聖夜の餐……一四
青春の……二三
積雪一丈……二六
惜春の……二九
制帽の……三八
青年の歌……六三
攻める扉……六三
税務署出て……六五
銭湯に……六八
青年長髪……七六
聖書一冊を……一二〇
先生と……一二五
背の小さい……一二五
選挙をば……一四四
禅僧の……一五四
清冽な……一五八
背番号……一七〇

そ

蕎麦の花……

掃苔の母の……四五
掃苔の隣……六七
走馬灯……一三〇
その日以後……一三六
その時の……一五六
その朝も……一五九
宗祇の水……一六七
蘇州では……一七五

た

竹植えて……七
旅人も……七
立話……一〇
蛸壺へ……三一
旅ごころ……三四
立ったまま……四四
断崖絶壁……五〇
滝冰る……五〇
立ちたくて……六二
滝の白……六四
大文字額……八一
大文字夢……八一
大輪の……八三
誕生の……八九
立たせたき……九二
大文字恋の……九三
大文字はや……九三
端然と……一〇一
田中を刺し……一〇四
磔像へ……一〇六
タンポポの……一三六
タンポポは……一三八
楽しげは……一五〇
旅人へ……一五二
堕地獄の……一五三
大正は……一六三
大山も……一七四
但馬牛……一七七
探梅に……一七八
七夕の……一七八

ち

父親に……一二
父と来て……一二
知恵の輪を……一三
父恋し……一九
蝶の妍……三一
地の果ての……四六
長男の……八四
父の忌に……九四
父の乗る……九四
蝶がいて……一〇三
朝刊の……一〇三
チューリップ……一一三
頂上に……一一五
父の苦悩に……一二〇
父親の……一四八
父と子と……一五一
猪口を持つ……一五七
茶の間では……一六五
父の日か……一六七

つ

妻若し……九
つり合わぬ……二五
土に字を……三五
月見草……四一
妻よ子よ……四五
妻に病まれ……七九
梅雨明けの……八五
吊皮は……九〇
露草よ……一一六
蔓ばらと……一二六
つきあいで……一三五
月が出て……一四三
梅雨ついて……一四五
梅雨の街……一五二
鶴の愚鈍……一五八
月天心……一六一
吊皮に……一七一
妻に買う……一七六

て

テロリスト……一四
寺と萩……二三
テレビ見る……五八
天使と同じ……六二
てんと虫……六八
天井が……八二
手に足に……八九
鉄の火と……一〇四
天来の……一〇八
手榴弾……一四〇
鉄砲玉も……一四七
剃髪をして紫……一六四
剃髪をして煩悩……一七四

と

都会の夜……三
特急は……一八
遠き人を……三二
東郷湖……三六
鳥追笠を……三九
遠めがね……三九
獰猛な……四四
同期の桜……五九
十年経て……六二
友来たる……六四
冬夜の凍て……七二
通り抜け花の……八四
当選を……九四
陶枕に……九七
どう呼ぼうとも……一〇五
トンネルが……一〇八
通り抜け附和雷同……一四六
道化の死……一四八
年寄の……一五四
飛ぶ鳥へ……一七七
東京の……一七七

な

長靴の……五〇
中之島……五六
何もかも……五六

夏雲の……五九
汝が祈り……六二
長崎の……一〇六
就中……一一一
仲間割れ……一一六
夏の愛……一二八
なかんずく……一六七
内緒ごと……一七〇
長年の……一七二
夏の風邪……一七四

に

二枚ずつ……六
忍従の……二五
煮凍りよ……三五
入試の子と……三五
虹消えぬ……四〇
入学へ……四六
虹の輪に……六九
入院や……八二
西成の……一〇七
似てるなと……一一五
人間を……一一六
任侠は……一一七
入学の……一三一
虹の子を……一三四
忍耐も……一三七
入学と……一五〇

ね

熱の子へ……二
猫の首……一四
寝正月……二七
猫柳……七四
合歓の花雨に……一二九
ネクタイの……一三一
寝転んで……一五〇
合歓の花母の……一五九

の

のけぞって……一〇〇
飲む会の……一三二
喃妻よ……一四二
のれん分け……一七一

は

パトロンが……五
花の香を……六
万歳万歳……八
半白の……一八
蜂の歩くは……二二
鼻の孔……二七
初鏡……二七
パチンコ屋……三二
羽根ペンで……三三
母の手を……三六
初恋の……三七
墓の前刻去る……四五
春惜しみおり……四七
春風の……四七
春孤独……四七
鼻先を……五一
蓮の花は……五二
母と来て……六〇

墓があり……六四
花の墓……六九
晩涼の……七一
吐く息も……七三
斜に見て……八一
ハラキリ由紀夫へ……八三
反葬は……九一
花つけて……一〇一
花言葉……一〇五
晩秋に……一〇九
花火爆ぜ……一一〇
ハワイ行……一一一
ハワイまで……一一九
母一人……一二一
背徳や……一二一
敗戦忌……一二一
初日記……一二二
パントマイムの……一二二
はた目には……一二五
鯊を釣る……一二九
花嫁に……一三〇
花の宴……一三一
鳩時計の……一三二
初明り……一三三
蜂蜜に……一三八
敗戦日分水嶺……一四〇
敗戦日われ……一四〇
ハンカチを……一四〇
杯なめて……一四八
花の散る……一五五
母の顔……一五六
白秋は……一五七
白菜の……一五七
花の絵の……一五八
母病むに……一五九
亡母の闇は……一六〇
亡母の闇この世は……一六〇
墓の前もとの……一六〇
初光……一六三
白牡丹……一六六
亡母の闇黒い壜……一六七
花よりも……一七一
番号に……一七八
八十に……一七九

ひ

病院の風呂……一三
人の世や棺に……一五
日向ぼこ病衣……二一
火の消えた……二四
ビリの顔も……二八
日向ぼこ梅干……三三
膝に手を……三七
ひた走る……四二
灯を消せば……四三
一人去り……五一
人を待つ……五八
彼岸会の……七〇
一人旅……七一
人の世や嗚呼……七六
病院の丑満刻……七八

病院の金魚……七八
病妻は……七九
光堂……八〇
日の高さ……一〇〇
昼の月……一〇一
氷嚢の……一〇九
氷柱花……一一九
昼の酒……一三一
昼は花を……一三八
百匹に……一四〇
火の恋と……一四一
髭を剃る……一五五
鰭だけを……一六一
人妻と……一六一
豹を着て……一六五
日だまりに……一七二

ふ

冬晴れて……二
文机に……七
フランス語……一一
富士小さし……二〇
降る雪に……二六

へ

三四
蛇が皮……五
四四
絲瓜のあお……五三
五〇
ベトナムや……五七
五九
ベトナム遠し……五七
六〇
ベトナムの……八六
六五
紅椿……八九
六五
ペディキュアの……九九
七九
遍路杖……九九
八〇
へらへらと……一〇〇
八七
臍の緒が……一〇〇
八八
ペン握る……一一四
九一
臍放り出して……一一九
九五
紅唇もまた……一六二

ほ

一一六
本心が……三
一二三
ぽんぽんの……五
一三三
牡丹へは……九
一四八
螢飛ぶ……二九
一五五
河豚提灯……一六九
河豚食うて……一二三
葡萄食べ……一三三
古手紙……一四八
訃は常に……一五五

鬼灯よ……四一
ボディビル……四一
ボーリング……五〇
忘恩や……六九
牡丹雪……七三
望郷よ……七六
綻びを……一一四
ポッペンは……一一七
穂芒の……一五三
本棚を……一五七
僕の富……一六八
本棚に……一七四

ま

魔の山と……一七
曼珠沙華君と……三九
幻の……六一
真心を……六四
待つ人が……六五
曼珠沙華恋わるる……七五
枕抱いて……八一
麻酔より……八二
曼荼羅に……一一八
マズルカへ……一三二
丸い石……一三四
毎日の……一七八

み

皆君の……八
乱れ髪……一七
水の精……一八
水枕……二一
みぞおち匂う……四二
耳濡らす……七二
水浴びの……九一
見残した……九二
水飲めば……九四
耳垢と……九九
三日月は……一〇二
禊する……一〇五
三日月が……一〇七
水の上……一〇九
水の渦……一二四
水子塚……一三七
自らに……一三九
水は低きに……一四九
見返るに……一六五

む

麦の穂が……二
紫の椅子……一九
陸奥哀し……一〇四
紫に……一二三
昔から……一二三
紫の花……一三二
紫の色の……一三四
紫は……一六六

め

飯を食う……八
明治百年……五五
明治村酔生……六一
明治村烈婦……六一
眼鏡屋は……七一

目に余る……一〇七
目に見えぬ……一一〇
眼鏡拭き……一六七
面の裏……一七〇

も

黙契や野に……八六
黙契やいまも……九〇
聞香の……一〇一
桃の花……一二〇
ものを書く……一二一
モンロー忌飯田蝶子……一二七
モンロー忌黒子の……一二七

や

病みて長し……二一
柳ポプラ……五四
山男……九三
安からめ……九六
病み上りに……一一八
やがて女は……一二四
八百長相撲も……一四二
やわらかい……一四七
優しい人を……一五四
やがて君と……一六三

ゆ

湯槽出る……四
浴衣着て……九
百合も薔薇も……二二
憂鬱を……二二
雪を掻く……二六
誘拐を……二八
夕桜琴……七三
夕桜恋の……七四
雪国の……八〇
憂国忌……八七
夢に見る……九九
逝く春へ……一一七
夢醒めて……一一八
油断して……一二三
友情に……一三〇
遊学の……一三五
夕桜釈路郎……一三七
雪霏々と……一四八

よ

呼鈴を……一五
夜の波……七〇
淀川の……七二
夜の長さ……七七
読み初めの……七九
四つ足で……九〇
呼び戻す……九六
読む限り……一〇二
養命酒……一四三
横揺りに……一四九
横顔の……一五三
余呉の湖……一六五
世の移り……一七〇
吉野大夫……一七一

ら

落選の……四
ラッシュアワー……二〇

ラーメンの……三〇
落選す……一〇二
落日と……一二六
ラブレター……一三四
落胤の……一五一

り

陸橋は……七七
竜宮も……一〇四
緑陰に……一一三
柳暗や……一二七
流木は……一六一
りんどうの……一六四

る

ルンペンに……四九
ルバングの……九五

れ

霊柩車……一五
礼を尽くし……一八

ろ

労働歌……一

老醜の……七
六法全書の……二四
絽刺する……三三
臘燭の……六〇
老桜の……一四二

わ

わが妻に……三
驚の眼も……三〇
われもひとも……三九
わが子男子……四〇
わが影の……四四
われに過ぎたり……五一
われら迎う……一一一
童唄……一一三
われもまた……一五四
われをしも……一五四
若者の……一六九

あとがき

やはり今年のうちに句集を出そうと思いなおしたのは、六月の中旬、信濃への旅に出て梅雨晴れの白い雲を眺めたときで、即座に同行の西尾栞主幹に序文をお願いしたので、その気持は一層確乎たるものになった。

それからの慌しい作品集めは、身近かにある雑誌からの抄出となり、各地の川柳会で発表した作品は収録する時間の余裕がなかった。既刊の三冊の句集からも若干再録したのは還暦の年に当り、三十余年の川柳生活の足跡としてまとめたかったからである。

詩歌の本質は、相聞と挽歌がその両輪をなすものと考えている私は、はじめて川柳に接した当初から恋に関する句が多かった。第三句集「肉眼」の下半期、母と四国遍路に出た頃から、精神的なものを尚更に指向しはじめたように思う。そして、母の死の前後に頂点に達し、それ以後は腑抜けたように力が入らなくなってしまった。

愛染とは煩悩の意。私という人間の齷齪の姿にほかならない。

麻生路郎先生に師事する以前からご指導を得ていた、栞主幹の序文を戴けたことに心からお礼申し上げ、写真と、作品の整理の労を戴いた山本邦義氏と西出楓楽さんに、それぞれ深甚の謝意を表します。

七月十一日

橘　高　薫　風

著者印

川柳句集「愛染」奥付・定価・三千円・発行日・昭和六十一年八月二十六日・著者・橘高薫風・発行所・大阪市阿倍野区三明町二丁目十番十六号・川柳塔社